歓喜の瞬間へ

絶対に負けられない戦いがここにある

平成18年度関東大学テニスリーグ

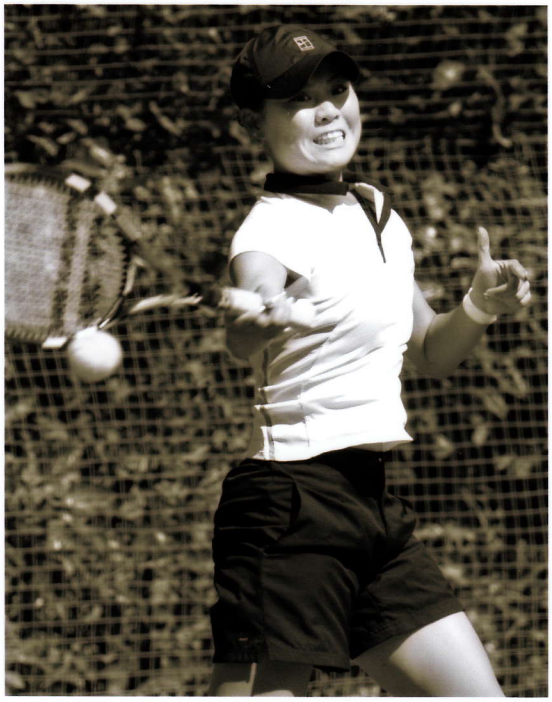
『一騎当千』。関東大学テニスリーグ女子4部での駒大の圧倒的強さはこの一言に尽きる。5戦全勝で完全優勝を果たし、3部入替戦の切符を掴んだ。駒大女子テニス部は去年、5部から4部に昇格を果たしたチームである。今期のメンバーは1、2年主体で「個々が強くてマイペースなところ」と主将川渕はこのチームの強みをあげた。

強いて言えば第2節の立教大戦が正念場だった。一番の山場と監督も語っており、さらに当日は天候不良によるコート移動、試合中断が重なり、「コートが変わったりしてやりづらいさがあった」（篠）という声が選手からも聞かれた。キーポイントとなったのがシングル4の樋口。第3セットにまで及ぶ熱戦となったが「スタミナ的に結構きつく、集中力もとぎれとぎれだったが、みんなの応援があって最後取り切れた」（樋口）と気持ちで勝利を手繰り寄せた。この勝利で完全に流れが駒大に移り、肉体的にも精神的にもタフな戦いを5-2で制した。

群を抜いた強さでの完全優勝。だが選手たちから喜びの声が聞こえてくることはなく、江口監督が「（3部に）絶対上がる」と意気込めば選手からも「（入替戦は）全勝して3部昇格を目指す」（松尾）「7-0で勝つ」（樋口）と強気なコメントが飛び出し、入替戦への強い思いが伝わってきた。10月15日の入替戦、3部昇格という歓喜の瞬間が刻一刻と迫っている。

（林　雄大）

※入替戦対戦相手はまだ発表しないが、女子はアウェー、男子はホームである。



3部昇格に向け果敢に挑む樋口（小室真梨子撮影）

◆戦績◆

第1戦	対明学大戦	○7－0
第2戦	対立大戦	○5－2
第3戦	対東女体大戦	○7－0
第4戦	対学芸大戦	○7－0
第5戦	対成城大戦	○6－1

（女子はダブルス2本、シングルス5本の計7本で行われる）

運命の分かれ道

平成18年度関東大学テニスリーグ

リーグ4戦目まで勝ち知らず。背水の陣で東海大との最終戦を迎えた。しかし、この日は何かが違った。

今まで結果を残せなかったダブルス陣が奮闘。そしてコートの後ろには必死に応援する選手達の姿があった。「テニスはゲームの流れや勢いが勝負を大きく左右する」監督、選手がよく口にする。応援がダブルスへ、ダブルスがシングルスへと勢いを与え、チーム一丸で激戦を制した。そして引退迫る4年の山内、森中、渡辺、林は誰一人負ける事無く結果6—3の快挙で最下位は免れた。よって3部リーグ2位との入替戦が決定した。「相手が格下と思わずチャレンジャーの気持ちを持って臨みたい」最終戦で絶妙なロブを見せ付けた主将の山内裕也。「入替戦は絶対勝って絶対残る」と江口監督も気合十分だ。ようやくエンジンの掛かった駒大。気持ちは既に10月14日の入替戦へと移っていた。

2部残留か3部降格の明暗分ける大勝負。駒大選手の「カモン！」と叫ぶ勝利のガッツポーズは見られるだろうか。2部の椅子を賭けての正念場、秋風さえも忘れさす熱い戦いが今始まろうとしている。（近藤　健吾）

主将として2部残留を目指す山内（斉藤拓也撮影）

流れに乗れず

第55回東日本学生相撲リーグ戦

9人戦のこの大会は、先鋒から3人が階級別とルールが変わり、小柄な選手の多い駒大には有利と思われた。

階級別の高田在秀（法3）ら3選手は、緒戦の東洋大、東農大の2校に対して勝ち越し、流れを作った。無差別級の選手は、この勢いに乗るかと思われたが、なかなか勝ち星を挙げられない。

次の大東大との一戦では、有利な攻めを見せて勝つことができた。しかし、力が互角と見られた明大、拓大との戦いでは星の取りこぼしが目立ち、2戦とも敗退。結局、1勝6敗の7位、かろうじて入れ替え戦を免れた。

「もう少し勝てると思った」と、チームを引っ張る日高哲也（地4）がと言えば、舘岡儀秋監督も「力不足。ひたすら稽古をするだけ」とこの大会を振り返った。

相撲部の今年の団体戦も、残るは11月のインカレのみ。それに向けて再び稽古を重ね、好成績を残してくれることを期待したい。（金野　人史）

すばやい攻めで、チーム最多の4勝を挙げた高田（金野人史撮影）